THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報　No.32　2010.11

目次

巻頭言　開かれた図書館　学術講演会　1
特集　第6回『言語力』大賞コンテスト　3
本との出会いを楽しむ〈第6回〉　6
図書館に関する話題〈第6回〉　7
Library News　8
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧　12

開かれた図書館 学術講演会

理事・副学長（社会連携・情報担当）　大河原　隆

私は、本年２月から弘前大学の社会連携・情報担当理事として附属図書館の運営に携わっています。

この間短い間ではありますが、２１年度において第一期中期計画をほぼその計画どおりに終え、本年度からは引き続き『地域における高等教育機関附属図書館の中核的機関として学術情報の収集発信を推進する』という第二期中期計画のテーマに沿って諸計画を実施することとしています。三年目になる文系図書整備５ヶ年計画推進、電子ジャーナル,学術情報リポジトリ等の電子図書館整備、先頃表彰を終えましたが、第６回弘前大学学生『言語力』大賞コンテストの実施や学術講演会等の主催事業もその内容の充実に努めながらも積極的に実施しています。

さて、本年度の主催事業である第７回学術講演会は私にとっても印象に残るものになりました。１０月１６日、５０周年記念会館のみちのくホールに於いて開催されましたが、演題は『弘前第八師団と日露戦争』（坂の上の雲の時代）と題して、明治大学文学部教授の山田朗氏を講師に迎えて行われました。当日はホールがほぼ満席約２５０名の市民や学生が熱心に聴き入っていました。もとより司馬遼太郎は国民的な作家で坂の上の雲はその代表作である上にテレビ放映もされるとあって、日頃あまり入り易いとは言えない大学へ市民も足を運んだことと思いますが、ここは開かれた図書館を標榜し、テーマの選定や広報の改善など努力の成果が現れて来たものと思われます。平成２０年度「江戸城大奥と天璋院篤姫」２１年度は太宰治生誕１００年事業として「太宰治・友情・愛・青春」等いずれもみちのくホールを満席にし、マスコミにも大きくとりあげられています。館長を先頭に魅力ある図書館事業に取り組む職員の企画

力によるものと思います。

講演では、第八師団の極寒の中での活躍について触れつつも、犠牲者の多い厳しい戦いであったとも話され聴衆の皆さんも胸を打たれたものと思います。私はと言えば、小学生の頃、祖母から乃木大将とステッセル将軍の会見、軍神広瀬武夫について等、日露戦争のはなしを聞いて育ったので大いに興味のあるところではありましたが、むしろ戦費調達に苦労した日本と情報戦略で国債発行を助けた英国のことなど新たにその裏面史に学ぶ処も多くありました。

また第八師団のことになると私の父もまた母方の祖父も弘前第八師団に勤務をしています。いずれも山形県の出身で結局は弘前の住人となり今の私が存在しています。父は満州の黒河まで野戦建築隊として従軍しています。

私は８年前にロシアのハバロフスクからアムール河を渡ってハルピンまで中国東北地方の満州を旅行しましたが、今年の夏は本学と姉妹校となっている延辺大学の延吉市から中国東北部の旅をして来ました。日露戦争から日中戦争の舞台となった旧満州を旅するという長年の夢をかなえた年でもありました。

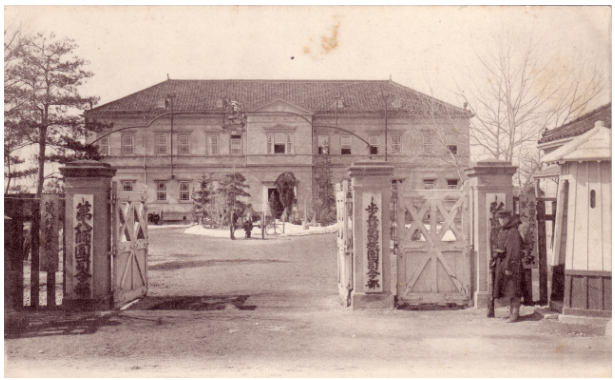
明治維新で廃藩置県となって、弘前藩都の弘前市は衰微します。それを救ったのが第八師団の設置であり、弘前藩の弘前市は軍都として賑わうことになりました。そして太平洋戦争が終結して弘前は戦災を受けなかったことから、今度は軍の施設も活用して学都として復活しました。

弘前大学は、本部、人文、教育学部などが元官立弘前高校敷地内に、そして理工、農学生命科学部はこれに接続する元第八師団司令部の跡地にあります。このように弘前大学は弘前市の歴史を象徴しております。

そして陸羯南（くがかつなん）の名山詩の如く、天下の賢たる人材の育成に努めながら、なお一層、教育・研究・社会貢献を通し、地域の経済・産業・教育・文化などの活性化に寄与するための努力を継続しているところであります。

（おおかわら　たかし）

本学姉妹校の延辺大学（吉林省延吉市）



第八師団司令部（現農学生命科学部門付近）
県史編纂グループ所蔵